

Title	慶應義塾図書館蔵卷子本[花鳥風月]解題・翻刻
Sub Title	Bibliography and reprinting of "Kachofugetsu" owned by Keio University Library
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.72- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵卷子本「花鳥風月」解題・翻刻

石川 透

解題

室町物語『花鳥風月』は、花鳥と風月の二人の巫女が、在原業平や光源氏等の霊を呼び出し、扇の絵が誰であるかを論争し合うという興味深い物語である。『伊勢物語』や『源氏物語』等の古注釈書類が利用されており、室町物語の成立を考える上でも重要な作品である。松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』一九八二年八月）によれば、古写本としては、高安六郎旧蔵文禄四年（一五九五年）写の奈良絵本（『室町時代物語大成』三等に翻刻）や、慶應義塾図書館蔵「室町後期」写の奈良絵本（極め「扇合物かたり」）『室町時代物語大成』三等に翻刻）が知られている。

ここに紹介する卷子本は、貼り合わせの順番が乱れ、巻頭が欠けてはいるものの、室町末期の古写本として重要な位置を占めるものである。

なお、『花鳥風月』については、拙稿「室町時代物語における『伊勢物語』享受」(『室町文学纂集』I、一九八七年九月)に少し記している。御参照願えれば幸いである。

本書の書誌は、以下の通り。

所蔵、慶應義塾図書館

番号、一三二X―五〇―

形態、卷子本、一軸

時代、「室町末期」写

寸法、縦一五・九糎

表紙、黄土色裂表紙(後補)

外題、ナシ

見返、金砂子散らし斐紙(後補)

内題、ナシ

料紙、斐紙

字高、約一四・六糎

奥書、ナシ

印記、冒頭に朱印「寶玲文庫」「慶應義塾図書館蔵」

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」・『』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。なお、（ ）括弧は同筆による補入である。

〔花鳥風月〕

（冒頭欠）

さるほとに、花鳥風月きやうたい、まいりぬ。

あねは、柳うらの桜のきぬの、にはひことなるに、紅のはかまきて、たんくわの口ひるあさやかに、せひたひのまゆすみほのくくと、色音も深きはつ春の、初音のけふの玉さかに、ひらけそめたる花よりも、なをめつらか也。

いもふとの風月も、藤重の二重衣に、紅のはかまきて、はくせつのはたえすきとをり、玉のかんさしゆりかけて、らんしやのにはひかほはしく、さか野、原の女郎花、露をもけなるふせひにて、ゆるき出たる有様は、なにしほふ風月も、けにもと思計也。

人く、是を御覧して、「あな不思議。東のをくのかたいなにも、かゝる女房の有けるか」と、今更めをおとろかす計也。

人く、おほせありけるは、「さるめひよの御事と、うけ給候間、尋申たき計て、是まで申て候」との給へは、「めひよまでは候はねとも、めしによりてまいりて候程に、わか上らふ様たちの、御なふり草には、なり参せんするにて候。

何事にても候へ」と申ければ、なりひらの方の人く、申されけるは、「此かんくゝの尋申人は、この世にある人か、なき人か。名をは何と申。男か女房か、委しくうらなひ給へ」と申されければ、あねの花鳥、「承候」とて、冊尺一と
り出て、つくくゝとまほり申やう、「『あらおもしろの御うらや。名はいにしへにならの葉の、こすへの露のたまさかに、跡とふ人もなき物を、なにしにたつね給ふ覧。われは是、けんよく三年九月二十三日に、たんしやうして、しゆんわ、にんりやう、もくとく、せるわ、やうせむ、五たひのてうに、つかへたてまつり、くわんちやうくわん年正月二十一日に、年五十六にて、むな敷なりし物、あとなり』と、御うらのをもてにみえて候。これは、うたかひもなき、いにしへのなりひらの御事を、御たつね候御心あてにて候けるや覧」と申ければ、人く、是をき、たまひ、めとめを見合、余に不思議にて、「いや、是は、御空事にて候。なにしに、今、なりひらの御事を尋申へき。能く、御うらなひ候へ」との給へは、花鳥、此由きくゝたまひ、「ちかひ候まし。なをなをも、不心におほしめし候は、わらは、あつさにかけて、こたへ申さん。ふう月、とひてに成て、とい給へ」とて、あつさのまゆみ、うちならし、「一しゆの歌にかく計、

おもふ事はてた、にややみなまし

我としき人しなけれは

そもくゝ、われは、これ、かんれゐわうの、まめおとこのなをゑて、一せうかいのうちに、ちきりをむすひし人の数、三千三百三十三人なり」。

そのとき、風月、「わらは、たつねてに成て、人くゝに、きかせまいらせ候はん。さても、五てうのきさきと申せしは、たれ人ぞ。」「かんいんのそう大しやう大しん、（ふゆつくこうの御むすめ、にんめう天わうのきさき、御とし二十

八、なりひら二十二にて、はしめてあいたてまつり候」。

「そめ殿、きさきは、たれ人ぞ」。「大しやう大しん、」よしふきの御むすめ、もんとく天わうのきさき、みつのをの御かとの御は、これなり」。

「さて、二条のきさきと申て、あつまのをくまでぬすみとり、ことに、御身をくるしめしは、たれ人の事やらん」。

「あら、なつかしの人の名や。うれしくも、尋給ふものかな。それこそ、中なこんなりよしの御むすめ、せいわ天わうのきさき、御とし十五、なりひら二十二にて、いまたた、人にてをはせしとき、忍／＼にちかづきたてまつり、ある時は、をにひとくちに、おそろしきめをみ、またある時は、むさし野を、けふはなやきそと、もの、ふをうらみ、すみた川にては、都鳥にことをとい、うつの山にては、人に言伝をし、そくはくの心を尽せし人の御事なり」。

「さて、いせさい宮の御事は」。「あな、事もかたしけなや。もんとく天わう、たいこの御むすめ、かたしけなくも、いせさい宮のねうこにて、わたらせたまいしを、ちやうくわん十ねん、なりひら、かり野、つかゐるとき、はしめてあいたてまつり候。かへるあしたのことの葉に、

きみやこし我や行けむをもほへす

夢かうつ、かねてかさめてか

とありければ、返事に、

かきくらす心のやみにまとゐにき

ゆめうつ、とはこゑるさためよ

と申せしも、かたしけなや」。

「さて、かきりちまきのねうはうは、たれやらん」。「それこそ、あにゆきひらのむすめ、さたかすのしんわうのは、にて候」。

「さて、へんの宮す所ときこえしは」。「ひろよしの御むすめ、にんめう天わうのみやす所にて候」。

「なま心あるねうはうなときこえしは、たれ人の事やらむ」。「それこそ、その比、てんかにならひなき色このみ、てわのくんし、おの、よしさねかむすめ、こまちか事にて候」。

「きつにはめなてとわひしねうはうは」。「みちのくのかみ、さかのうゑのつらをかむすめ」。

「また、そめ川の女はうときこえしは」。「ちくせんのくに、あをきかもと、しなかわらちかむねかむすめ」。

「つくもかみの女はうは、いかに」。「ちふのせう、藤はらのさたなつかきうさいなり」。

「さて、よ人はたれぞ」。「それこそ、いせか事にて候。この外、かすくあまたおをけれど、ことしければ申まし」。

「をよそ、この人くの御事は、せんきまちくにして、いゑのくてん、ひとつならず。いつれのいゑをか、もちい給ふへき」と、ねんころにもんたうしけれとも、人く、なをもかくして、なりひらとものたまはねは、「いやく、さのみな御かくし候ぞ。御このほねおりに、はやく、あかさせ給ふへし」。「まさしく、御心のうちに御たつね候人は、なりひらの御事を御たつね候へるこそ、かやうには申候へ、しんしつもとめ給へる人は、なりひらにてははんへらす。人たかへにて候へし。御うらのをもて、あつさの所に、あらはれいてたまる候へし」と申ければ、人く、これをきくたまい、ふしきさ、かきりなくて、めと目を見あわせ、したふりをしてこそをはしけれ。

さて、源氏のゑといひし人、す、み出て申されけるは、「御うらの、あひあはぬ事は、さてをきぬ。言語道段聞事に

てこそ候へ。それかし、又、いと尋申度事候。是、かまえてく、懇に御うらなひて給候へ。人たかえは、いかやうの人、きたり給へるそ。能く不心をはれ候様に、てふもん申候はん」とのたまへは、「誠、御大事を御尋候は、われら、御かゝみを、しんきやうと、あかめたてまつりて、もちて候。此御前にて、いきりやう、しりやう、にんけん、ちくるひ、仏神、三法、何にても、あらわれすと言事なし。御尋候人を、唯今、此鏡に祈りうつして、人くみせ申さん。先、たねん、きやうりきをいれたてまつる、しんきやうの御前にて、かゝみのきとくを申さんするにて候。そもく、われは是、しちうつし給ひしより此かた、しんきやう、いくわうほからかにして、せよくせのやみをてらし給ふ物をや。とをく、しやうこをあんするに、くわうていをかけて、つるに、しゆふをしたかへ、たうのたひそうは、人を以かゝみとせしゆへに、日本みな、しちとくのほまれをうかひき。あほうきうに、たてしかゝみの、すいとさんのふかきをしれるなり。たれか、鏡をしやうせさるへき。しくさんに、きうゆうあらはれす。かのやうめいせんしは、しんきやうのろくをあつめて、心をめうきやうのうてなにとふ。

年をへて花のかゝみとなる水は

ちりかゝるをやくもるといふらむ

不思議やな。かのむらさきのうへの、すまの別をかなしみて、『かゝみをみても、なくさみてまし』と、よみたまひし古のことは、ふとうかみて候。あはれ、ひかる源氏の御事を御尋候にこそこさんなれ。なをくせいをいたし、いのりあらはし申さんするにて候。それ、めうきやうにてらさすして、せぬすいに、かゝみをみるに、これ、よくみかけると、すめるによつてなり。こゝに、われら、きみやうのたな心をあはせて、けいしゆとうやまゐ、さいはぬく」とふしおかみて、申て申さく、「ねかはくは、はやく、一めんのかゝみのかけに、只今、たつね給ふ、はうれぬのかた

ちをあらはして、立所に、しよ人のふしんの、あきらかに見せ給へ。「しかれば、すなはち、たつぬるところの、むかしかりは、かたしけなくも、しんむくわうていの御すゑ、ちせぬふさうのけんくんの御名をは、わさと申まし。かの物かたりにも、『いつれの御ときにかありけん』と、つくりくたりぬる事なれば、さうなく、いかてかあらはさん。なをも、ふしんにおほし候は、我身を、ひかるけんしのありさまに、いのりなして、か、みのかけに、いのりうつして、人／＼にみせ申さん」とて、「くもかくれせし夜半の月、ひかりをまたやあらはさむ」と、をし返し／＼、二三へんうたいければ、まのあたりに、あふきかけるゑのことくなる、くけ上らふの、なをしかふりちやくして、みえける事こそふしきなる。

人／＼、きためのおもひをなして、みる所に、花鳥、か、みにうつれるけんしにかはりて申けるは、「きりつほの天王第二のみこ、六てうのいんとは我事なり。たやすくなのらしとはおもへとも、くもかくれせし後は、あいへむりくのつみにしつみて、いまたうかむたよりなし。されは、ありし世の事とも、物かたりしてほろほさん。さんけのくとくによりて、すこしのつみをもまぬかれんかために、只今、か、みのかけにあらわれむ。われはこれ、たしやうのえんあるによりてなり。かまへて、人／＼、あととふらひてたひ給へ。さいしやうさんけ申まいらせ候。はれ、三さみと申せし秋のころ、は、かういにをくれたてまつり、なみたをそへて、いと、しく、むしのねしけきあさちふに、露けきながらすこししを、こはきかものとさひしさと、はく、みたまいし御めくみ、いともかしこきちよくにより、けんしのしやうを給て、十二にてけむふくし、かうらいこくのさう人、こま人といひし物、ひかるといゑるなをつけしより、ひかるけんしといひしなり。は、木、のまきに、中将、もみちのかのまきに、しやうさんみ、あふひに、大将、さかきのまきに、とし二十三にて、ち、御かとにをくれたてまつり、かの花のえんの春のよに、行衛もしらぬちきりゆへ、とし二十

五になりしとき、つのくにすまにうつされぬ。あまのなけきを身につみて、又のとしの春、はりまのあかしにうらつたみ、とわすかたりの夢をさへ、かたりなくさむ人もなし。さるにても、三とせはすまのうらさひしさを、なにとしはの屋の、うらもまちかきあしかきの、たけのあみ戸の明くれは、うきふしなにとすかむしろ、ならはぬひなのすまひして、人はなれる里なれば、都のたよりもたへはて、なみたにくもる月のかほ、ちいさき舟をなかめても、しほやくけふりに、身をいため、しはといふ物かりしきて、おもひをすまの山おろし、こゑ野にかよふしかのねは、うしろの山にほとちかく、なみこ、もとにふる雨は、うしほにうつる声なれや。たひころも、うらかなしくもなかむれば、あはちしま山ほのみえて、たかすむ里そまきの戸の、ちりまさりせぬすまゐまで、おもひのこさぬ事はなし。なきさのとまやにをとするは、あまのさえつりくいなの声、ひちかさ雨のしめくと、おもひの秋の色となく、をとき、なる、たかしほの、かちめを入に過行は、せめて思ひやなくさむと、うつしうへたるわか木のさくら、さけとも花はいなかにて、すむわれさへにいつしかと、山かつめきてひな人の、忍ふ宮このかたみには、みの日のはらゐなて物、おくり物にて笛のねも、ひくたまこともなつかしや。さる程に、天下にきとくのつけありて、程なく宮こにめしかへさる。かすのほかなる大なこんにあかり、うちつ、き、身をつくしのまきに、ない大しん、おとめのまきに、大しやう大しん、藤のうらはに、大上天わう、かくたのしみをきわめしに、むらさきのうへのわかれより、光をかへすいなつまの、程なき夢の世中に、色をたしなみかほかさり、高き^{たか}いやしくをしなへて、ぬしなきもぬしあるも、かくれあらわれおもひせし、女のおもひやつもりけむ、おもふ人にはとくわかれ、後の世までもかなしむこそ、わか身なからもおろかなれ」と、かれうひんの御こゑにて、なきくときかたり給へは、みな、おもしろくも、また、あはれにも、ふしきにこそはおもひけれ。さるほとに、いもうとのふう月、気色、少うつ、なきふせゐにて、「あれ／＼見給へ。か、みのかけに、わらはもあ

らはれいて候そ。はつかしや。末つむ花のかすならて、おもひや色にいてにける」と、をし返し／＼、二三へんうたひければ、あふきにかけゑるゑのことくなる女はうの、口お、ひして、けんしの御かけに立より給ふとみえしかは、かのねうはう申けるは、「きみは、いつくえとてをはするそ。この世にてこそ、うとまれまいらせ候め、めいにては、あるねんのおにとなつて、かけのことくに、はなるましき物を」とて、なをも、御かけにたちよりける。

さる程に、花鳥、けんしにかはりて、物をいふ。ふう月は、末つむ花のゆふれりとなりて、もんたうしけり。

その時、大将、のたまひけるは、「そも／＼、いかなる人にてまします。みたるともなきすかたかな。をもはゆければこそ、くちお、ひをはし給ふらむ。これ程、人の御らんするに、見くるしき御ふるまるや。とく、たちさらせ給ふへし」との給へは、「われをは、たれもしりたまはぬや。御心しりの、たゆふのめうふに、とひ給へ。」「さては、ひたちの宮の御むすめかや。」「なか／＼、わらは、六てうのいんにさふらゐて、あまたの数には入しかとも、なさへいやしきよもきふの、かれ／＼なりしちきりのすゑ、うらめしければ人しれす、ねたき心はありしかとも、た、数ならぬ身にはちて、しらすかほにてさてすきぬ。たとい、しやうをへたつとも、あいねんのきつなきれされは、なをうき人につきそはん。あなはなるましの我身や」とて、なをも御身にそる給へは、大将、のたまひけるは、「いせ宮所をこそ、物ゑんしのをはせしとて、物かたりのおもてにも、うたてしき御事に申せしか、末つむ花の御事は、ものゑんしし給ふとも、かの物かたりにのみえぬものを。されは、何事のうらみにより、これまで来り給ふそや。はや／＼、御かへり候へ」とおほせければ、「物語にこそか、るとも、今の世までも、末つむ花のなをもえたり。『みたるともなきすかた』とは、あらうらめしのことはや。いて／＼、すきたる事なれとも、物ねたみして、くるはん。あふひの上ときこえしは、せつしやうたいしやう大しんの御むすめ、ときめき給ふ御事を、めさましとのみみしほとに、夕きりの君をうみを

き、ほとなく、かくれたまひしうれしさよ。むらさきのうへと申せしは、ゆかりのくさをたつねとり、いときなきよりむかへとり、はく、みたまひし事なれば、御心さしもたくひなし。ときめき給ふ御事を、うらやましとのみみしほとに、わかなのまきにやまゐつき、御のりのまきにうせ給ふ。世中なへてなけしかとも、われは、それほとをもはす。あかしのうへときこへしは、中宮の、かくめてたきにつけても、あなつりにく、成行は、き、みるたひにすぎましや。花ちるさと、申せしは、れゐけてんの御いもうと、いとかすかにてましませは、我身はしられいとをしや、とはおもひしか、よかれとまではをもわれす。六てうの宮す所と申せしは、もの、けにあらはれて、よろつの人のあたとなる、心ふかきもおそろしや。なにとおもふとこの人を、にくまていか、あるへき。女三の宮は、ち、御かと、ことになしくしたまゐて、かのうき人にゆつりしに、ゑもんのかみのおもふ事、けふりくらへにあらはれて、御心にも入されは、人にはいはす、心にはをかしとき、て、さてすきぬ。御ま、は、のふちつほと、おほろ月夜の御事を、おもへはことにくけれど、いひちらさんもなさけなし。さすかに人の御ためも、いたはしければ、よかたりに、人もこそきけ申し。なかにも、物、にくかりしは、たまかつらのないしは、夕かほの御むすめ、御ま、むすめ成しを、夜は夕やみの比かとよ、か、り火すこしともさせて、引さすことをまくらにて、御うた、ねのつきなさよ。うつせみのあま君、かすにもあらぬ人たにも、さるそときけは人しれす、しつとのこゝろ、ほのをとなりてむねをやき、あるねんのきつな、身をこかす。又、うちかへしあんするに、物のねたきは誰ゆへそ。よし、なに事もうちすて、うらみは末もとをらしや。せめてか、みのかけにても、恋しき人をみるやとて、鏡によりてかけみれば、あたりもひかる御かけに、また我かけをならふれば、す、けあかめるこうちきの、ふるきのかわきぬうへにきて、ふけんほさつののり物と、かきと、められし筆のあと、いま身にしれてはつかしや。この日ころ、あるねんのきつな、おもひきり、しんと心をひる返し、す

きにしかたの事ともを、われとこゝろにさんけして、くわうくわいのなみた、せきあへす」、袖をかほにをしあて、申ければ、大將、の給ひけるは、「やさしくも、おほしとりける物かな。そもく、御身をたつね申人もなし。なに、これまてきたり給ふらむ」。

「いまた、しりたまはずや、たゝいま、ふしんをなすあふきの絵に、いつそや、雪のあした、御かへりのとき、まつのゆきをはらわせて、

ふりにけるかしらのゆきをみる人も

をとらすぬらすあさのそてかな

とよみたまいしとき、わらはも、みすちかく、さそはれてたりし所を、かきたるゑにてさふらへは、此物かたりをたよりとして、日比のうらめしさを申なり。これまてなれや、人く、いとま申てかへるなり。たゝいまの物かたりは、さいしやうさんけまいらせ候。あととふらゐてたひ給へ」と申ければ、かゝみにうつりしかけもなく、風月も、もとのすかたになりて、夢のさめたることくなり。

人く、きとくのおもひをなしてみる所に、けんしの御かけは、かゝみにあり。花鳥、ゆふれるのきたるふせるもなかりければ、はむろの中なこん、すゝみ出て申されけるは、「ありかたき御ゑんかな。此あふきのふしんにより、むかし語の御すかたを、をかみたてまつる事、たしやうのえんなれは、御ほたる、ねん比にとふらゐたてまつるへし。くはしく御物かたり候へ」と申されければ、「やすき事なり。なに事にても、たつね給へ」とその給ふ。

「そもく、かの物かたりには、ていわうなん世のこともあかせるそや」。

こたへてはいく、「まつ、せん代の御ことはさてをきぬ。きりつほの御かとよりはしめて、しゆしやくいん、れいせ

むいん、今上、春宮、五たひなり」。

「御したるにふしんあり。まつ、しゆしやくいんの御は、は、いかなる人にてをはしけるやらむ」。

「二てうのくわんはくあく大しんのむすめ、こうき殿、大きさいの宮、これ也」。

「れるせんいんの御は、は」。「せんていの四の宮、うすくものねうるんとも、藤つほのみやとも、か、やくひのみやとも申なり」。

「うちてうの事は」。「われ、ひかりかくれしのち、にはふひやうふ卿の宮、かほる大将の事、つくりそへたるをよそゑて申へき。人にまつ、

きりつほの 秋をおもひの はしめにて なをのみ残す は、木、の 心もしらて たひねせし 君はなみたの
かたたかゐ おもひこりても さてあらて なを人からそ なつかしき かたみのそてを またぬらす 夕かほの
末はの露を き、しより 人のいのちは おひたるも わかむらさきも たのまれます 心おさなき はく、みも
みるかゐありし さまなれや せみかの まる人の たちいにつけて わすれぬは もみちの賀の 御あそひ こ
ゝろにかゝる 藤つほの あたりゆかしき 花のえん かも御あれの あふひくさ くるまをかさる あらそゐ
も のちは夢とや 成ぬらん かの野、宮の たひところ 一えた折し さか木はの なをなつかしみ 吹かせの
花ちるさとを すきぬらむ なをこりすまの およひたけ 雨はまかきの なかにして 夜もすから 月にあかし
の うらつたゐ なを身をつくし 思ひ行 ひたりやみきの ゑあはせに あらそひ さはくまつ風の きえてま
た吹 うすくもの けふりのはても あはれなり 世をあさかほの 花の露 なをなつかしき をとめ子か かた
みに残す たまかつら 我身にとむる むめかへの 藤のうら葉も ときすきぬ はかなも老と 成ぬへし われ

さきたらは なきあとを とへかしわきの はかなくも 夢につたへし よこふへを ふきよわりたる 山かせに
夕霧はるゝ 小野、里

そもく、けうしゆしやくそんは、御のりの道を尋つゝ、夢まほろしの夜半の空、ついに、ねはんのくもかくれ、いさ
もろともに、さいしやうの、くもあつくして、やみはれて、心の月をあらはさん。うれしきかなや、只今、きやうけむ
き、よのたはふれに、花鳥風月をえんとして、むしやうほたひにいたりなく、しやうしそくねはん、ほんなうそくほた
ひとも、いまこそ、おもひしられたり。いとま申て、人く」とて、花鳥、さしきを立ければ、かゝみにうつりしかけ
もなく、御こも、もとのすかたに成にけり。

これをみきく人く、ゆめまほろしの心ちして、うつゝとも、さらにをものはれず、おもしろさといひ、一かたならぬ
ふしきにて、人くのと、ゐさんたん、なのめならず侍りける。こ袖十かさね、こかね十両たまはつて、御こは、ま
かてけるとなん。ほんのまゝ。